

# ロンドンの水辺空間整備について

## 1. はじめに

平成5年8月29日から9月13日にかけて欧州の街と水辺の整備状況を視察する機会を得た。今回はロンドン、ローマ、ウィーン、アムステルダム、パリの五都市について河川と都市の整備について視察した。ヨーロッパの都市の特徴として①石や煉瓦の建物が連続している、②旧城壁が広い道路となっている、③宗教建築である教会が町の中心にある等言われているが、ウィーンでは、その特徴が良くわかる。

また、訪れた都市では河川ぞいに河岸道路が整備され、大きな木が植樹されている。日本においては台風による樹木の倒木の可能性があるため高水敷、堤防への植樹は禁止されているが、セーヌ川では高水敷に新たに植樹していた。欧州の河川と比較して日本の河川の特徴は、広い高水敷が存在すること、河岸の植樹がないことが大きな違いではないかと実感した。視察は短期間にいろいろな都市を視察した。そのため、都市河川の一断面しか見ていないが、今回はロンドンの視察報告をいたします。

## 2. ロンドンの街と水辺空間整備

イギリスの森林は開墾に加え造船や製鉄用として切りつくされ、伐採した跡は羊の放牧地になっていく。また、18世紀以来囲み込みが進行して多くの畑地が放牧地に転用された。日本は森林の面積率からいえば森林が多いといえる(表-1)。ロンドンの標高は46m、年平均気温は9.5°C、年平均降水量は760mmであり、最大降水月は11月であり、約80mmの降水量がある。東京の年平均降水量1460mm、最大降水月9月の193mmの半分以下である。

### (1) リージェンツ運河

19世紀半ばになると鉄道が発達し運河の内陸水運は衰退

表-1 主要国の土地利用 単位: 千ha

| 国名   | 総面積   | 農用地(牧草地)     | 森林(%)       |
|------|-------|--------------|-------------|
| イギリス | 24160 | 17837(11180) | 2400(9.9)   |
| オランダ | 3392  | 2026(1198)   | 300(8.8)    |
| イタリア | 29406 | 16938(4850)  | 6737(22.9)  |
| フランス | 55010 | 30628(11380) | 14811(26.9) |
| 日本   | 37652 | 5243(647)    | 25105(66.7) |

の運命をたどる。運河は現在、レクリエーション水路として再生されている。

リージェンツ運河は掘り込み式であり、兩岸の斜面には植樹がされており緑におおわれた空間になっている。周辺の道路からは運河は見えない。また、運河の隣接の土地には公園、動物園等があったが、周辺の土地からは自由に運河にアクセスできない。運河の中にはたくさんの船が繫留されており運河の横に幅3メートル程度の歩道が整備されているが、舗装は粗末なものである(写真-1)。この道は運河の引き舟道として利用され、かつて運河交通に欠くことの出来ないものであった。運河で出会った人はサイクリング、ジョギングで利用している人が主である。散歩している人はわずかである。水上バスの停船場がロンドン動物園の下にあった。



写真-1 リージェンツ運河

### (2) テムズ川

テムズ川の河岸は垂直な石積護岸で整備されている。ロンドンでは干満の差が大きく護岸は緑色になっている。ウェストミンスター橋からブラックフライアーズ橋にかけてテムズ川の西側に連なる岸はビクトリア・エンバークメントと呼ばれ1864年から70年に建設され、ヴォクソール橋からウェストミンスター橋にいたるおよそ一マイルの右岸はアルバート・エンバークメントと呼ばれ1866年から70年、上流のチェルシー・エンバークメントは71年から74年にかけて工事が行われた。河岸道路の歩道には植樹がされており緑豊かな並木を見ることができる。高さは4~5階まで大きくなっている。高さにすれば15~20メートルに達すると思われる(写真-2)。上流はリッチモンドからティントンまで視察したが上流に行くと周辺の土地と河川が一体になった利用がされている(写真-3)。また、テムズ川にかかっているアーチ型の橋は単一の色ではなく塗り分けられている。



写真-2 テムズ川河岸



写真-3 テムズ川（リッチモンド周辺）

### (3)ドック・ランド

テムズ川はロンドンで干満の差が約6メートルもある。こうした大きな干満の差は、船舶が大型化すると、河岸での積み卸しが不便である。そこで水位変動に影響されず荷役ができるドックが建設された。ロンドン港では1802年に最初の西インド・ドックが完成する。ところが、港湾機能の変化に伴って、港湾機能は河口へと移動し、ドックは過去の遺物と化し、周辺の遊休港湾施設とともに、その開発が課題となった。

ドックランドはロンドン・タワーの下流に位置する港湾業務地だった約2,200ha 地域全体を指す。ワッピング、アイルオブドッグ、サリードックス、ロイヤル・ドックス地区の四つの区域に分かれている。そのうち、ワッピング、アイルオブドックスの二地区を訪れた。グリニッジから河川を横断している地下歩道でアイルオブドックスに出た。ライトウェイ・システムの終着駅がある。また、ドックランド・ビジターセンターがあり計画の紹介として、ビデオ、パネルなどが展示していた。キャナリー・ウォーフ・タワーの部分には人々が集まっていたが、対岸のグリニッジに比較して賑わっているとは思われなかった。旧ドックはレジャー船の繫留場所になっている。水質はテムズ川の水質

に比較して良いように思われた。(写真-4)。当初シテイの賃貸料よりも安く設定した価格が、不況の影響で価格差がなくなったために開発も苦しいようである。

ワッピング地区のタバコ・ドックの開発は昔の建物を活用して開発されたものである。訪れた時期が休日であったため、地区の賑わいの状況ははっきりとしないが、賑わっているという印象はうけなかった。



写真-4 ドックランド キャナリー・ウォーフ・タワー

### 3. おわりに

外国の運河や河川整備が都市部の水辺空間整備のすぐれている事例として紹介されているが、ロンドン、パリ等の都市部の河川でも日本と同様に貴重な土地を生み出すための河川整備がなされている。河川改修によって土地を生みだし、その土地を経済活動のために使っている。国内の掘り込み河川である福岡の那珂川、岡山の旭川、京都の鴨川等の沿川利用と比較すると、外国との差は広い河岸道路の用地を取り、道路に植樹をしているかどうかが一番の違いであるように思われた。

日本では戦災復興の仙台の定禅寺通り等、多くの都市でシンボルとなる道路植樹がある。また、数少ない河岸緑地の例として広島の本田川、宇部の真綿川があるが、河川沿いの植樹で立派なものは思いつかない。30年もたてば立派な樹木が形成されるが、時間が必要である。

現在、水辺の役割を再確認し水辺空間を活かした整備が進められている。しかし、一度市街地が形成された場所では整備していくには巨額の事業費がかかり、急激な整備はできない。重点地区を限定し、河川沿いにできるだけ広い用地を取り植樹も含めた整備を確実に進めていくことが重要であると思う次第である。